

## [026] 語文研究表紙奥付等

<http://hdl.handle.net/2324/10243>

---

出版情報：語文研究. 26, 1968-10-31. 九州大学国語国文学会  
バージョン：  
権利関係：



# ◇ 学 会 集 報

## ▼ 講義題目 昭和43年度第一学期

(大学院) 国語学特研(日本霊異記)

(大学院) 全 演習(万葉集)

(学 部) 全 特講(近代の文法論)

(学 部) 全 講義(国語史—音韻と文法—)

(大学院) 国文学特研(近世文章史の研究)

(学 部) 全 演習(都賀庭鐘の作品)

(学 部) 全 講義(近世小説史)

(学 部) 全 演習(芭蕉七部集)

(大学院) 国文学特研(文学史研究の諸問題)

(大学院) 全 講読(仲文集)

(学 部) 全 特講(源氏物語論)

(大学院) 全 特講(近代作家研究)

## ▼ 昭和42年度卒業論文題目

学部

新美南吉の童話の研究

前田家本三宝絵の研究

古浄瑠璃における説経ものについて

源氏物語宇治十帖の自然についての考察

和泉式部の和歌

近松時代に於る操人形の所作

今昔物語集における接続詞

古代国語における助詞「を」について

宝物集二巻本の研究  
西鶴町人物研究—致富と倫理の問題を中心に—  
「抗夫」の研究

春雨物語の研究  
とはずがたりの研究

歌人実朝の研究  
宇津保物語の音楽

大学院

尾張蕉門俳諧の位相  
芭蕉の俳文—その文体論的試み—

## ▼ 九大国語国文学会総会並びに研究発表会

研究発表

馬内侍集諸本の系統について

仮名文に於ける拗音仮名表記の成立

「もぞ・もこそ」の用法

「に」と「へ」の混用—近世初頭九州関係資料の場合

豊後杵築俳壇をめぐって

将門記本文の再検討

神階記に認められる薩隅方言の研究

「源氏物語」への一視点—循環拡大・深化の方法—夕霧物語をめぐって

「柳澤騒動」實録の転化

總會 決定事項

田中丸福代  
豊田 民子  
中村 玲子  
林 隆明  
広瀬 晋也  
深町 貴子  
宮本智恵子

春日 教授  
春日 教授  
春日 教授

中村 教授  
中村 教授  
中村 教授

中村 教授  
中村 教授  
中村 教授

今井助教授  
今井助教授  
今井助教授

重松 教授  
今井助教授  
今井助教授

阿部 武庸  
石川 勢

内野 春彦  
内海 充子

梅田 京子  
遠藤 和恵

佐藤 克子  
高浜 啓子

原口 裕  
田中 道雄

笠 栄治  
秋田 義昭

伊藤 博  
中村 幸彦

○福田良輔先生を顧問に御推戴。

○語文研究維持会員制度について、会員の増加による部数の不足を新制卒業以後の維持会員二二名の方々に普通会员になつて頂き、補うことに決定。

○幹事改選(新幹事・敬称略)

橋本元二郎(四年卒) 泰美種(六年卒) 上村孝二(八年卒) 平井秀文(九年卒) 井手恒雄(一三年卒) 秋山正次(一五年卒) 寺園司(二二年卒) 西丸妙子(三三年卒) 原口裕(三四年卒) 船津正明(三七年卒)  
於エスキモ  
懇親会

▼十八回西日本国語国文学会

昭和43年9月21・22日

於宮崎大学

研究発表(本会会員の分のみ)

一条朝詩壇と本朝麗藻

定家の仮名遣いの成立について

芥川竜之介「或阿呆の一生」

中世の注釈書における古語の把握

—古今秘註抄を中心として—

露伴の説気について

五井蘭洲の文学観

公開講演

中世における価値観と文法

▼会員消息

内野春彦氏(昭和四十二年卒業)は去る四十三年九月十四日

井手 恒雄

中村 幸彦

瀬里 広明

佐田 智明

海老井英次

後藤 昭雄

追野 虔徳

於エスキモ

逝去されました。衷心より御冥福をお祈り申し上げます。

▼受贈図書

昭和43年1月17日

訓点語と訓点資料36・37

国語表現法概説

国語科教育法概論

国立国語研究所年報

永富家の人びと

歌集その白き花を

日本文学の歴史一、三

国立国語研究所報告31・32

西行和歌各句索引

九州古俳書年表稿

義山雜纂通釈

六花抄翻刻(岡山大学池田家文庫本)

評伝宮澤賢治

みなし栗

鹿児島県川辺郡笠沙町片浦方言

鹿児島県熊毛郡上屋久町宮之浦方言

訓点語学会

有 精 堂

有 精 堂

国立国語研究所

鹿島守之助

太田弁次郎

角川書店

国立国語研究所

山本幸一

大内初夫

目加田さくを

三浦晃功

境 忠一

近世文学研究会

上村孝二

出雲朝子注⑤「天文頃までの抄物にエウ↓オウという混同例がみられないことから、その拗長音化は室町中期をそれほどさかのぼらないものと思われるのである。」(一一九頁)

浜田敦「長音(下)」、「人文研究」二巻六号(昭26)「凡そ鎌倉時代の頃にこの様な変化(注、長音化)の兆がきざしはじめてゐたのではないかと思はれる。」(二五頁)

福永静哉「浄土真宗伝承音の『ワリ仮名』について―中世音韻史上における地位―」、「女子大國文」二〇号(昭36)「少なくとも鎌倉時代をふくめた中世の間に、これらの連母音 au・ou・eu・iu が長音音化されていったと考えることは許されてもよからう。」(九三頁)

「浄土真宗伝承音の研究」(昭38)(五四頁) 参考

尚小林芳規氏は注⑥論文で、「日本字音における eu と ou との音韻の表記が、混用される。その最も盛に例を見るのは鎌倉中期以降であるとして才段長音(合)の存したことを認められるが、それが体系全体に及んだものかどうかについては明確でない。

(22) 都竹通年雄「アウ・オウからオーへ」「近代語研究」第二集(昭43)の見方に賛同したい。

(23) 「平安時代の国語」(一二三頁)

(24) 注①「文学研究」五八輯(四五頁)

(25) 注(21)(一五一頁)

(26) 土井忠生訳「ロドリゲス日本大文典」(六三〇頁)但しこれは橋本博士が「この ou は ö の場合の oo と同じく、葡萄牙流に発音するのであらう。葡語では、ou は合音の o に発音する。」(「吉利支丹教義の研究」二五七頁)と述べられたようなものであれば、この記述も問題にすることはない。

(27) 「続日本文法講座2表記編」(六〇頁)(昭33)

### ▼受贈抜刷 昭和43年1月～6月

今昔物語集副詞概観(大分工専研究報告4)

紫式部の人間観と文芸観(愛媛大学紀要13A)

西洋で刷られた最初の日本文学(宇部短期大学学術報告)

平家物語南北朝期の本文の研究(一)(名古屋大学教養部紀要12)

「おくのほそ道」の一考察―「松嶋」から「平泉」まで―

山下 宏明

(宮城教育大学紀要2) 金沢 規雄

翻刻「狂歌友のかきほ」(関西大学「研修」14) 中野 真作

吉町 義雄

表現をはじめ、作者別における用語、歌調・歌体・用字・修辭  
 ；等多方面におけるあやなす表現美を浮彫りにしようとした  
 著者の意図が本書全体に流れていることは見過さないようにす

(昭和41年7月30日・風間書房刊行。非売品)

▼受贈雑誌 昭和43年1月～6(その二)

- 文学1～6月  
 国文学解釈と鑑賞1～4月  
 国文学解釈と教材の研究12～6月  
 言語と文芸56～58  
 文学語学47  
 解釈11～5月  
 国語学(国語学会)70～72  
 万葉(万葉学会)66  
 国文学伝統と現代1  
 音声学会会報126・127  
 連歌俳諧研究(俳文学会)34  
 文芸研究(日本文芸研究会)57・58  
 日本歌謡研究4・5  
 古典と近代文学2  
 書陵部紀要19  
 万葉文学1  
 軍記と語り物5  
 説話(説話研究会)1
- 史迹と美術38巻3  
 文芸と批評2巻6～8号  
 人文論究(北海道学芸大学)28  
 学園論集(北海学園大学)11  
 北星論集(北星学園大学)4  
 文化(東北大学文学部)31巻2  
 日本文学ノート(宮城学院女子大学)3  
 国語と国文学1～7月  
 国語研究室(東京大学)6・7  
 人文科学紀要(東京大学教養学部)44  
 一橋論叢2～5月  
 言語文化(一橋大学)4  
 国文(お茶の水女子大学)28  
 国文学漢文学論叢(東教大文学部)13  
 学苑12～6月  
 国学院雑誌11～4月  
 国語研究(国学院大学)24  
 野州国文学(国学院大学栃木短大)1
- 文芸研究(明治大学文学部)18  
 明治大学教養論集40～43  
 明治大学人文科学研究所年報8  
 国文学研究(早稲田大学)37  
 語文(日本大学)27・28  
 日本文学(立教大学)19  
 法政大学文学部紀要13  
 成城文芸48・49  
 論究日本文学31・32・33  
 文学論藻37・38  
 王朝文学15  
 上代文学研究学会会報(東洋大学)18  
 成蹊国文1  
 成蹊大学文学部紀要3  
 国文学踏査(大正大学)8  
 駒沢国文6  
 国文鶴見3  
 富士論叢13巻1  
 実践文学32・33  
 短大論叢(関東学院女子短大)32・33

は、更に新たな発展的分野を示唆し、読者の研究心をそそぐて、  
 やまないものがある。打消の「絶エにす(あ)レ「不」」(西 べて省略した。章節を追っての不得要領な要約に終始して意を  
 大寺本最勝王経古点) など、随所に見られる先生ならではの貴 講筵に連なった者として喜びこれにすぎるものはない。  
 重なる事例の提示や新見の紹介は、紙幅に余裕なく遺憾ながらす (昭和四十三年七月、風間書房刊、四〇〇〇円)

▼受贈雑誌 昭和43年1月～6月(その二)

- 国文学ノート(成城大学短期大学) 5
- 専修国文3
- 日本文学誌要(法政大学) 18・19・20
- 上智大学国文学論集1
- 和洋国文研究6
- 梅花女子大学文学部紀要4
- 跡見学園短期大学紀要5
- 跡見学園国語科紀要16
- 相模女子大学紀要28・29
- 鶴見女子大学紀要5
- 国文学論考(都留文科大) 3・4
- 人文研究(神奈川大) 37・38
- 人文論集(静岡大) 18
- 岐阜大学研究報告16
- 金沢大学法文学部論集15
- 金沢大学教育学部紀要16
- 金沢大学教養部論集5
- 国語国文学(名古屋大) 21
- 国語国文学報(愛知教育大) 21
- 滋賀大國文5
- 愛知県立大学文学部論集18
- 中京大学文学部紀要2巻1
- アカデミア(南山大) 63・64・65
- 富山高校国語国文学研究紀要7
- 国語国文11～5月
- 研究集録(大阪大学教養部) 16
- 文庫(大阪大) 17・18
- 学大國文(大阪学芸大) 11
- 女子大文学(大阪女子大) 19
- 女子大國文(京都女子大) 47・48・49
- 同志社国文学3
- 国文学(関西大) 42
- 人文学(同志社大) 101
- 人文研究(大阪市大) 19巻3～7・8～11
- 人文論究(関西学院大) 18巻2・3
- 障蔭国文学5
- 国文学論叢(竜谷大) 13
- 大谷学報47巻1～4
- 甲南女子大学研究紀要4
- 園田学園女子大学論文集2
- 文林(松蔭女子学院大) 2
- 国文学54・45・46
- 近世文芸稿13
- 中世文芸(広島大) 39・40
- 方言研究年報10
- 島根大学文学部紀要1
- ノートルダム清心女子大学紀要2
- 山口大学文学会誌18巻2
- 山口女子短期大学研究報告22
- 愛媛大学紀要13A
- 愛媛国文研究17
- 学習院大学国語国文学会誌11
- 甲南国文15

第四章では、詩集「春と修羅」の成立、「心象スケッチ」という独自の詩法の確立を、「冬のスケッチ」や、さらに先行する短歌における「素朴実在論的な発想」の方法化として把え、「土着的、現実的、個人的であることが、同時に超自然的、普遍的な——賢治のことばでいえば「四次元」的な（この「心象スケッチ」という）表現法は、「歌集」「冬のスケッチ」を経て、詩形式を持った」と論証されている。

第五章。「文学の密林」とも称される賢治童話を、作風の変遷をたどることによって系統だてるといふ困難な試行が展開され、章末に「宮澤賢治散文作品系譜」として結実されている。

第十章は二論文によって構成され、東北の一隅花巻にその生

活空間をほとんど限定したものととして把えられがちだった賢治と、東京の文壇の動きを追うことで自足していたこれまでの文学史と、この並列的な二者を有機的に結合すること、すなわち近代詩史上に賢治を定着させる一つの試みとしての意味をもっている。

なお、巻末に「付録」として、新発見短歌二十九首をはじめとして、「岩手県稗貫郡地質及土性調査報告書第一章」の転載など三十ページにわたる資料紹介と、「宮澤賢治所蔵図書目録」五ページ、「参考文献」四ページが付加されており、親切な編集になっている。（昭和四十三年四月桜楓社刊。四七一ページ 一八〇〇円）

▼受贈雑誌 昭和43年1月～6月（その三）

- 甲南大学文学会論集 35
- 愛文（愛媛大学） 6
- 高知女子大学紀要 16
- 日本文学研究（高知・同会） 6
- 国語の研究（大分大学） 3
- 国文学研究（梅光女子学院） 3
- 文芸と思想（福岡女子大学） 31
- 九州文化史跡研究所紀要 13
- 文学論輯 15
- 有明工業高等専門学校紀要 3
- 佐賀竜谷学会紀要 14
- 佐賀大学文学論集 8

- 佐賀大学人文紀要 3
- 国語国文学研究（熊本大学） 3
- 鹿児島大学文科報告 3
- 薩摩路（鹿児島大学） 12
- 国語研究（国漢筑豊） 10
- 研究論叢（筑紫古文研究所） 1
- 能楽思潮 42～46
- 朝鮮学術通報 4巻4～5巻2
- 文献ジャーナル 7巻1～5
- 肇国 302～308
- 白路 22巻11～23巻6
- 日米フォーラム 11～6月

- 八雲 12～4月
- コロニア文学 4・5
- 美夫君志 11
- 華 10
- 城 36
- オルペウス 1